

# 終わりからの旅

## —— 高齢者文学人生論

辻井喬(1927-2013) 本名：堤清二

『終わりからの旅』(2005)

詩集『異邦人』(1961) 室生犀星詩人省受賞

『虹の岬』(1994) 谷崎樹陰一郎賞受賞

『父の肖像』(2004) 野間文芸賞受賞

彼は自宅が見える丘の上に立っていた

『青べか物語』から『檜山節考』まで百篇の文学作品を読み終えて、呆然としていると、辻井喬『終わりからの旅』という本をすすめられた。高齢者向け浪漫文学ではないかと思いつながら読む。

現在、日本には三千万人以上の高齢者がいるというが、そのうち何人がこんな小説を読むのだろう。この題名は人生が終わったと思っっている高齢者の旅心を誘い、まどわせておいて、突き放す。

「彼は自宅が見える丘の上に立っていた。五十五歳になっていて、それは今までの生き方を振り返りたくなる年頃である」。

人生五十年の時代ならともかく、人生八十年の現代では五十五歳は高齢者とはいえない。関良成という主人公はまだ現役の新聞記者で、『現代人の俳句全集』という企画を進めていた。

彼には外食チェーンを経営している忠一郎という七十代の異母兄がいる。作者の辻井喬は詩人と経営者という異質の二面を持ち、この作品の執筆の時点では七十八歳。その後、八十六歳で肝不全により逝去した。良成と忠一郎には作者が投影されているが、年齢は忠一郎のほうが作者に近い。

二人とも妻帯しているが、終わりを意識しながら、昔の恋人を探す旅に出かけようとする。それが空しいことだとは思っていない。良成の恋人は若い頃、かぐや姫のように姿を消した茜、忠一郎



# 終わりからの旅

高齢者文学人生論

の恋人はユダヤ系リトアニア人のグレタ。

良成が編集責任者の『現代人の俳句全集』は高浜虚子以降の三十人の俳人を選び、風景を数多く挿入するという方針だが、三十人の俳人の中で特に強く意識したのは飯島晴子のようだ。

俳人には長寿者が多く、自殺する俳人はめったにいないといわれているが、例外はある。飯島晴子は七十九歳で自死を選んだ。

やっと死ぬ父よ晩夏の梅林 飯島晴子

という句は自死と関連があるのではないかと、私は直感的に思った。やっと死んでくれたか、父よ、もっと早く、惜しまれながら死ねばよかったのに。しかし、この解釈ではロマンにならない。

良成の恋人の茜はメモ用紙でこの句を見ているうちに突然泣き出した。自分の父親が息を引き取った時、その頭を撫でながら、「やっと楽になれたわね」と慰めた。

そのことを伝え聞いた良成は、花が散り実の熟れきったあるいは落ちてしまった梅林こそ父の死にふさわしい。そう理解した時、娘は苛酷な父の死から脱出できたのではないかと考えたという。

父の死は作者十五歳の時、俳句は三十年後、四十九歳の作。（上杉晴一郎「日曜詩人」参照）。

蛍の夜老い放題に老いんとす 飯島晴子